

乳母子伊賀平内左衛門家長

——理想化された知盛の死——

辻 本 恭 子

はじめに

壇ノ浦合戦で平家は義経率いる源氏軍に大敗し、やがて源氏の世が幕を開けることになった。この海戦では多くの平家の武将が討死あるいは入死水していて、その中には清盛の四男平知盛の姿もあった。清盛亡き後、兄である宗盛と共に一門を率いた武将は、最期にめのと子伊賀平内左衛門家長と鎧二領を着て手を取り組み、海中に沈んだと物語は伝える。ところが、この場面で家長を「知盛のめのと子」とするのは主に覚一本、そしてそれ以降の本であり、他本の多くはそのようには書いていない。後世にもっとも享受されたといえる覚一本の影響であろうか、この伊賀家長なる人物は一般に平知盛の乳母子であると認識されてきた。しかし、諸本を読み合わせて考えると、この人物は知盛配下の武士ではあっても乳母子ではありえないのではないかと思われる。本稿では、この人物を「平知盛のめのと子」とする点に、覚一本による知盛の死の理想化を考えたい。

一、平家諸本に描かれた家長

物語において、諸本共通して家長が登場するのは壇ノ浦合戦の知盛入水死の場面であり、また、室山合戦の場面にも多くの本に家長が描かれる。この他、本によつては一の谷合戦後の知盛の述懐中や、敦盛の遺体返還の記事中に家長の名が出るが、諸本による記事の有無、あるいは人名の異同があるので、はじめに壇ノ浦と室山の記事を確認し、続いてその他の場面を把握しておきたい。

A、壇ノ浦合戦知盛入水

戦の顛末を見届けた知盛が「見るべき程の事は見つ」と入水を決意した場面で、知盛の側近くに控え共に海中に沈む武士として、諸本に共通して「伊賀平内左衛門家長」が登場する。覚一本はこの人物を「知盛のめのと子」と書く。ここにその本文を挙げ、該当する諸本の記事を分けておく。

新中納言「見るべき程の事は見つ。いまは自害せん」とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長をめして「いかに、約束はたがうまじきか」との給へば「子細にや及候」と中納言に鎧二領きせ奉り、我身も鎧二領きて、手をとりで海へぞ入にける。

(覚一本 卷第十一 内侍所都人)

この場面で、伊賀平内左衛門家長を「めのと子」(乳母子、乳人子)とするのは、他に長門本、南都本、城方本、米沢本、流布本などである。これに対して、延慶本、盛衰記⁽¹⁾、四部本、屋代本、百二十句本、鎌倉本などにはめのと子という言葉がない。延慶本では「中納言ノ御命ニモ替奉ムト云契シ侍五六人」のうちの一人として描かれるが、乳

母子とは書かれない。また、めのと子と書く本も、ここ以外の箇所では家長に「知盛のめのと子」という表記はない。

B、室山合戦

物語では法住寺合戦よりも前のこととされ、義仲を避けて西に向かった行家が、義仲の勘気を和らげるためか、平家が布陣する室山に向かつて戦をしたとする。平家は陣を五手に分けて行家らを陣の奥へとおびき寄せ、取り籠めて戦った。戦は行家軍の敗北に終わり、行家は死地を逃れて逃走したという。このときの平家軍の布陣について、覚一本は伊賀平内左衛門家長が二陣を二千余騎で固めたとし、延慶本、長門本、盛衰記、南都本では、家長は四陣の大將になっている。鎌倉本は二陣に「家永」の名がある。ここで鎌倉本は知盛を「朝盛」と表記していることなどから、家永は他本でいう「家長」であると考ええる。源平闘諍録は室山合戦の五陣の内に家長の名は記されず、屋代本、城方本、鍋島文庫本などは五陣の大將を記さない。

C、殿上の闇討ちの際、庭に伺候していた忠盛の郎等

忠盛が昇殿を許されたことを快く思わず、これを討とうとする策略がめぐらされるが、忠盛自身と郎党家貞の機転によって難を免れる場面である。覚一本を含め、多くの本では、このとき庭に控えていた郎党を家貞一人とするが、読み本は二人の郎党が控えていたと書く。延慶本は家貞と「弟薩摩平六家長」、長門本は家貞と「舍弟薩摩の平六家房」、盛衰記は家貞と「子息平六家長」とする。

D、一の谷合戦後の知盛述懐

一の谷の合戦で、子息知章の犠牲の上に辛くも命を長らえた知盛が、兄宗盛の前で述懐する場面に、読み本は家長の名を記す。延慶本では、知盛は「家長モヨモ生候ワジ」と述べ、続く文中に家長という人物の説明が「伊賀ノ平内左衛門、是ハ新中納言ノ一二ノ者ナリケレバ、命ニモカワリ、一所ニテ何ニモ成ムト、契深カリケル者共也」と書かれる。長門本も同様に「家長もよもいき候はじ」「家長は伊賀平内左衛門也、是は新中納言の近習なり、命にもかはり一所にていかにもならんと、契ふかかりしものなり」とし、盛衰記は「家長、有国ナドモヨモ生侍ラジ」「家長トハ伊賀平内、左衛門有国トハ武藏三郎左衛門也。此等ハ新中納言ノ一二ノ者ニテ、命ニモ替、一所ニテ如何ニモナラント契深カリケレバ、中納言モ子息ノ武藏守ト同惜ミ給ケル侍共也」とする。

E、一の谷合戦後の敦盛遺体返還

同じく一の谷合戦後の描写に、読み本では、語り本にはない敦盛の遺体返還の記述がある。敦盛を討った熊谷直実が平家の陣に近づき、書状の遣り取りの後、敦盛の遺体と遺品を返すというものである。

源氏の陣から小舟が近づき、平家軍が何事かと慌てる中、知盛は使者を遣つて事の次第を確認しようとする。延慶本ではその様子を「新中納言、家長ヲ召テ、アレホドノ小舟ニ如何ナル樊会張良ガ乗タリトモ何事力可有。家長見テ参レ、ト宣ヘバ、家長、郎等二人ニ腹巻キセテ、吾身ハ木蘭地ニ色々ノ糸ニテ、師子ニボウタムヌイタルヒタ、レニ、ワキニ小具足計ニテ、ハシ舟ニ乗テコギ向タリ」と書く。長門本は「新中納言のたまひけるは、いかなる樊噲張良が乗たりとも、か程の小船に何事のあるべきぞ、平内左衛門はなきか、行向ひて事の仔細尋ねよかし、伊賀平内左衛門家仲は、木蘭地に色々糸をもて、獅子に牡丹をぬひたるひた、れ、こしあて小具足ばかりにて、郎等二人に腹

卷させ、はし船にとり乗り、熊谷が使の船におしむかひて、事の様を尋ねける」とし、延慶本での「家長」が「家仲」になっている。しかし、どちらも「いへなか」であり、先のBの場合と同様、また平家物語においては「伊賀平内左衛門」は「家長」以外にいないことから、この「家仲」は「家長」と考えても良いであろう。

盛衰記はこの場面を簡略化し、鍋島文庫本も書状以外をかなり省略しているが、平家の陣からの使者を迎えた熊谷が託した書状を確認しておく。末尾を見ると、延慶本「進上 平内左衛門尉殿へ」、長門本「進上 平内左衛門尉殿」、盛衰記「進上 平左衛門尉殿」、鍋島本「進上 伊賀平内左衛門尉」となっている。この書状に対して敦盛の父である経盛が返書を遣わすが、その末尾は延慶本「左衛門尉平奉 家長 熊谷二郎殿ノ御返事」、盛衰記「左衛門尉平公朝 熊谷次郎殿 御返事」であり、長門本と鍋島本は経盛から熊谷へとする。盛衰記の仲介者「平公朝」については後述する。

F、一の谷合戦の死者

一の谷の合戦では、平家軍に多数の死者が出た。それら敗者の首は都で獄門に懸けられたと物語は記す。延慶本、長門本は一の谷で戦死した侍として、越中前司盛俊、筑前守家貞の名を挙げ、都で渡された首のうち、侍の首は、越中前司盛俊の首などとする。盛衰記では一の谷の死者に、越中前司盛俊と共に「伊賀平内左衛門尉家長、武藏三郎左衛門有国已下、京都辺土ノ輩、四国西国ノ者共」を書くが、都で晒された首の名は「盛俊、家貞、侍此人々の頸也」とあって「家長」の名が消え、延慶本、長門本の一の谷戦死者に名前があった「家貞」になっている。

G、壇ノ浦合戦前、武士らを鼓舞

壇ノ浦合戦を前に知盛が武士らを鼓舞すると、これをうけて侍らが、陸戦に比べて海戦は自軍が有利であることや、敵の大將義経の風体などを言い合う。ここで延慶本は「伊賀平内左衛門家長ガ申ケルハ、世ハ不思議ノ事哉。金商人ガ所従ノ、源氏ノ大將軍シテ、君ニ向奉テ弓ヲ引、矢ヲ放ツ事ヨ。御運ノ尽サセ給ト云ナガラ、心憂ク安カラヌ事哉トテ、ハラ／＼トゾ泣ケル」とし、また盛衰記もほぼ同文を載せる。

H、平家残党、頼朝を狙う

建久六年に、頼朝が大仏供養のため上洛したところ、これを狙った平家の残党が捕えられた。この残党を、延慶本は「薩摩平六家長」とする。同じ人物は覚一本「薩摩中務家資」、長門本「薩摩中務丞宗助」、四部本「薩摩中務丞家祐」、鎌倉本「薩摩中務家助」、平家以外では保暦間記に「さつまの中務」と書かれている⁽²⁾。この人物については、既に、『吾妻鏡』建久六年四月一日の記事にある平家家人の「前中務丞宗資父子」という指摘がある。角田文衛氏はこの場面の延慶本の「平六家長」を、「薩摩平六こと前中務丞・平家資」とであるとされている⁽³⁾。

以上、諸本の「家長」登場箇所を比較して見てきた。はじめに述べたようにほぼ共通するのは壇ノ浦合戦知盛入水記事、次いで多くの本に見えるのが室山合戦記事、その他、主に読み本に数箇所の記載があることがわかった。

二、主な系図に見る家長

ではこの「伊賀平内左衛門家長」とはいかなる人物であったのかを、主な系図資料で確認してみたい。

『尊卑分脈』には家長の名はない。また、通説では家長の父であるとされている「家貞」自体に系図上の曖昧な部分が見られる。ごく近くに「家貞―貞能」が二度出てくるのだが、貞季―範季―家貞―貞能と①、貞季―正季―範季―季房―家貞―貞能②を見た場合、貞季の孫である①の家貞はともかく、忠盛の郎党であり清盛の代にも仕えたということを考え合わせると②の家貞では年齢的な不整合があると考えられる。この系図に漏れた人物を記載した、続群書類従所収の「尊卑分脈脱漏」の「平氏系図」⁽⁴⁾には「家貞」の子として「家長」の名があり、「平六」という添え書きがある。しかしこの系図も家貞自身に曖昧な部分がある。また、「家長 平六」は管見の限りでは他資料に確認ができず、先にあげた平家物語記事のC、Hが典拠になっている可能性が排除できないと考える。

『寛政重修諸家譜』⁽⁵⁾では、服部氏の内に伊賀平内左衛門家長の末裔とする家があるが、庶流の呈譜に家長末孫とあることについて、「いまさゝぐるところの譜、其祖の出るところは少しく異なりといへどもみな平氏なりといひても服部氏所見なく、しかれども一家の説にして他證を得ざればみだりにあらためがたし」とあり、江戸期に末孫を称する家にも諸伝のあったことが伺える。服部氏のうちのいくつかの家が祖を家長とすることについては、物語中の「元は平家に伺候していた服部平六」が「服部（伊賀国）の地を返された」という記事と関わりがあるかもしれない。この「服部平六」は他本にも登場する。「伊賀」にゆかりの「平六」と、延慶本や盛衰記で「平六」家長とも書かれた「伊賀」平内左衛門が混同されたということもありえるのではないか。

『系図纂要』⁽⁶⁾は家貞の子に家継、貞能、家長、家実とあって、家長には「平内左衛門 仕知盛卿」と書く。また家長の子に家清、その子に宗清があつて柘植家の祖とするが、『寛永諸家系図伝』⁽⁷⁾では柘植の祖の宗清は民部卿信実の子としている。

家貞や、その子として系図に記される貞能（物語では清盛、重盛の腹心として活躍）は、系図には疑問もあるもの

の外部の資料に名が見えることもあって⁽⁸⁾、その実在を認めることができる。しかし、家長については、系図資料上での確定も難しく、外部資料にもその名を確認できない。本稿は史実上の伊賀平内左衛門家長を特定することが主旨ではない。ただ、系図資料からは把握の難しい人物であるということは確認しておきたい。

三、物語に書かれた知盛のめのと

では、家長という人物が平家軍の知盛配下の侍であったとして、「乳母子」という点はどうであるのか考えてみたい。石井由起夫氏は家長について、乳母子であるにもかかわらず一の谷の合戦という重要な場面に登場しないということと、『健寿御前日記』の記述の二点から、「知盛の乳母子」であったことを否定されている⁽⁹⁾。

一点目について、石井氏は覚一本について論じられているので、確かに一の谷合戦に「家長」は登場しないということになる。しかし先に見たように、読み本では、合戦のさなかの様子ではないものの、知盛の述懐の中に「新中納言ノ一二ノ者」、「近習」と語られ、敦盛の遺体返還の仲介もしている(D、E)。また、覚一本においても室山合戦には登場しているので(B)、重要な場面に登場しないとは言い切れない。二点目については、「家長は家長の父である」という前提に疑問はあるものの、『健寿御前日記』の「紀」については氏の御指摘の通りであろうと考える。

『健寿御前日記』の、いわゆる女房摘の記述の中に、「紀 武藏中将知盛のめのごとぞ聞きし。髪よかりき」という記述がある。ここから石井氏は、その候名から察するに「紀」は紀氏あるいは紀伊守に関係のある父兄を持つ女性であるはずだとされた。しかし、家長も家貞も紀氏ではなく、紀伊守とも縁がないようである。また、もし「紀」も家長も知盛のめの子だとすると、二人は兄妹(姉弟)でなければならず、そうなると家長の母が建春門院の女房の母と同一人物、もしくは、家貞の妻に建春門院の女房の母がいた、ということになる。石井氏は、家貞は平氏とはい

えかなり昔に家人化した低い身分の者であり、それが建春門院の女房の母を妻としているとは考えにくいと論じられた。

ここで注目される「紀氏」に関しては、知盛の子息知忠について注目すべき記述がある。知忠は、幼かったために平家一門の都落ちの際には伴われなかった。平家が壇ノ浦で敗れ、源氏によって平家の残党狩りが行われていた頃、伊賀大夫として隠し育てられていた知忠が反乱を起こして討ち取られたこと、その首を、壇ノ浦から生還した知盛の妻治部卿局が確認したことは、いくつかの平家物語に書かれている。この、知忠を平家都落ちの時に預かった人物を、覚一本は「めのと紀伊為教」とする。またこの記事を持つ本は、文字に異同はあるがすべて「紀伊ためのり」あるいは「ためなり」が知忠を預かって養育したとする。ここでは覚一本の本文を引く。

新中納言の末の子に、伊賀大夫知忠とおはしき。平家都を落しとき、三歳にてすてをかれたりしを、めのと紀伊次郎兵衛為教やしない奉て、こゝかしこにかくれありきけるが、備後国太田といふ所にしのびつゝゐたりけり。

（覚一本 卷第十二 六代被斬）

この記述からは紀伊為教を「知忠のめのと」と読むこともできようが、本来ここは「知盛のめのと」であるべき人物ではないのか。屋代本は、知忠を預けた相手を「乳人の夫紀伊為成」とし、前述のように壇ノ浦での家長には「乳母子」の言葉がない。

紀伊為教は、読み本でははっきりと知盛の乳母人と書かれている。鹿ヶ谷での謀議が露見したとき、連座した者共は清盛に捕らえられて処罰されたが、その中に西光法師がいた。西光は捕えられた後も清盛をののしり、清盛の怒りにふれて口を裂かれた上で殺されたとされる。ここで読み本は、西光の処刑に際して知盛が助命嘆願をしたこと、し

かし聞き入れられなかったことを描く。

西光ハ、三位中将知盛ノ乳母人紀伊二郎兵衛為範ガ舅ナリケレバ、知盛二位殿に付奉テ、タリフシ被申ケリ。為範モ「人手ニ懸候ハンヨリモ、申預候テ誠候ハン」ト、再三申ケレドモ、終叶ハズ、切レニケレバ、三位中将モ為範モ世ヲ恨テ、サバカリノ騒動ナリケレドモ、指モ出給ハザリケリ。

（延慶本 第一末 西光頸被切事）
西光法師ハ、入道ノ三男ニ三位中将知盛ノ乳人ニ、紀伊次郎兵衛為範ト云者ガ舅也ケルニ依テ、為範ガ主ノ三位中将ニ歎申。中将又様々ニ預リ候ハント被申ケレ共、入道不用給、責テハ手ニ懸ンヨリ、鯉ニテ侍ベレバ為範ニ預給候ヘト、低臥被申ケレ共、種々ノ悪口申タリケルニ依テ、入道終ニ聞入給ヌ。

（盛衰記 卷第六 西光父子亡）

長門本は、延慶本とほぼ同文である。ここでは、西光の娘を妻としている紀伊為範（覚一本は為教）が、知盛の乳母人であつたとするのである。先に、石井氏が、家貞が身分的に建春門院の女房の母の夫にふさわしくないと御指摘になつたことを述べた。読み本系の物語が書くように、知盛の乳母人の舅が西光、すなわち知盛の乳母が西光の娘だつたとすれば、西光の乳母子であつた信西⁽¹⁰⁾の妻が後白河の乳母であるという点から考えても、知盛の乳母の娘（つまり乳母子）が建春門院の女房であることには何ら違和感がない。

また、平家一門が都を落ちて屋島にやつて来る場面で、知盛の知行国である長門国の目代としても紀（紀伊）氏が登場する。覚一本、延慶本、長門本、百二十句本、源平盛衰記などにおけるこの紀氏は、南都本、源平闘諍録などでは「橘」氏になっている。しかし、「立花」氏ではなく「橘」氏であることから、どこかで「きい」と「きつ」の混同があつたとは考えられないだろうか。なおこの目代は、紀も橘も諱はほぼ「みちすけ」にあたる文字になっている。

ただし、「橘」と知盛にも物語上では関係がある。壇ノ浦合戦で生け捕られた宗盛父子は鎌倉に送られ、後に京都に送られる途上で斬首される。このときの斬り手を、覚一本や『吾妻鏡』では「橘公長」、延慶本、長門本などは、その公長の三男「橘公忠」としている上、公長は知盛の侍であつたと書くのである。覚一本では別の場面にも「公長」の名前が出るが（巻九 落足）、そこでも「新中納言の侍清衛門公長といふ者」とされている。清衛門ならば、清原氏かとも思うが、きい・きつと同様の混乱は想定できないであろうか。また、「公」の片諱は橘氏に散見するが、一の谷合戦後の敦盛の遺体返還仲介役を盛衰記は「平公朝」としていること、この使者は延慶本、長門本では知盛配下であることも何らかの関係を考えさせる。さらに、壇ノ浦で生け捕られた捕虜の中にも「橘」季康、という名前が見える。平家方の武士として、最後まで離反せずに壇ノ浦まで付き従っていた者の中に橘氏が居たことに留意したい。

ここで再び紀氏であるが、覚一本も読み本も、室山合戦での知盛の侍に紀七、紀八、紀九郎なる人物を記す（覚一本では討死したとする）。この、兄弟らしき三人について、角田文衛氏は、知盛が息子知忠を預けた乳母の夫が「兵衛尉橘為範―通称紀次郎兵衛」で、室山で討ち死にした紀七などを彼の息子（つまり知盛の乳母子）とされるが、石井氏は、室山で死んだ紀の某というのも、家長の場合と同様、知盛の乳母子とは考えられないとされている⁽¹⁾。

四、家長は知盛の乳母子でありえたか

以上、物語内部で「家長」が記された箇所を確認し、また「知盛のめのと」の記述を比較してみた。その結果、以下の点から、家長は知盛の乳母子ではありえないと考える。

一、女房の日記に、建春門院の女房・紀が知盛のめのと子であるという記述がある。家長が建春門院の女房ときよ

うだいであるには不自然な点がある。二、物語に、知盛の遺児を養育して源氏に反乱を起こした知章の（あるいは知盛の）めのと紀（橘か）為教という名が挙がっている。読み本ではこの人物を知盛のめのととし、「めのと」の舅西光の助命嘆願する知盛」が描かれる。西光の娘が知盛の乳母ならば乳母子にあたる女性が建春門院の女房であることは妥当。また、紀、あるいは橘は、物語において知盛の知行国の目代であったり、知盛配下の侍であったりする記述が随所に見られる。三、家長を「乳母子」とするのは壇ノ浦の一箇所だけで、物語内部の他の記述や外部資料にはこれを裏付けるものがない。

また、家長は家貞の息子であるという説は、系図などでは不確かな把握しかできず、あるいは系図が物語に依拠していることもあり得るという点からも、確証がないと言わざるを得ない。仮に家長が家貞の子であるとすれば貞能の兄弟になるはずだが、物語あるいは記録類において、貞能周辺に一度も言及がないことにも留意したい。

さらに、「物語内部での不整合」という点も指摘できる。紀や橘や、あるいは系図など、物語外部の事を度外視し、諸本の物語内の記述を連関させて考えるとしてもなお「家長＝知盛乳母子」には疑問が残る。そもそも、「めのと」というのは、「めのとの子供」である。母親が仕えた者と特別な主従関係を持つ者を乳母子、父親が仕えた者と特別な主従関係を持つ場合を乳人子、傳子と書いて区別する場合もあるようだが、平家諸本ではこの通りの文字の区別はないようである。しかし、いずれにせよ本来は「乳母の子」、つまり同じ母の乳で育った擬似兄弟のような間柄を意味する言葉であることは確かだろう。例えば木曾義仲と、今井兼平をはじめとする中原兼遠の子息らの例をみても分かるように、同じ女性を母・乳母として育っている以上、乳母子同士には年齢に極端な開きはないはずである。つまり、家長が知盛の乳母子であるためには、たとえ形式的にでも家長の母親の乳で知盛が育っていなければならない。両者はあまりにも年齢が開き過ぎていてはおかしいということになる。

ここで諸本の記述をいささか無理ながらも連関させて考えてみると、まず、忠盛の殿上の闇討ちの場面で、家貞と共に子息家長を登場させる盛衰記では、家長の年齢を十七歳としている。天承二年に十七歳ならば、壇ノ浦で入水するときには七十歳になっており、知盛よりも三十六歳年上になる。これでは、「乳人」ではありえても、「乳母子」ではありえない。

次に、壇ノ浦合戦に先立つ屋島の戦いである。このとき、那須与一が見事に扇を射たのを見て踊り出し、その後源氏に射殺された平家の侍を、盛衰記は「伊賀平内左衛門尉の弟、十郎兵衛尉家員」とする。物語では、家長の他に伊賀平内左衛門と称される人物はいないので、これは家長のこととみて良いであろう。この、源氏に射殺された武者を、延慶本は「年五十余リナル武者」、覚一本も「とし五十ばかりなる男」としている。年齢五十余の人間の兄なら、最低でも家長は五十半ば以上となり、やはり知盛の「乳母子」になるには年齢が開いていると考えられる。なお、系図資料によつてはこの「家員」を「家長」の弟として書くものがあり、系図が依拠したものが平家物語なのではないかと推測する。

さらに、通説で家長の父とされる家貞は、忠盛や清盛に仕えた平家の重臣で、一一六七年に亡くなっており、享年は八十四歳である。この年、知盛は十六歳なので、仮に家長が知盛より五歳上だと考えても、家長は家貞六十三歳の時の子になり、やや不自然にも考えられる。ただし、先ほどの、盛衰記に基づいた「家長は、壇ノ浦のとき七十歳。知盛より三十六歳上」ということなら、家長は家貞三十二歳のときの子になる。そして、その場合、知盛の乳母「子」ではありえない

これらのことから、家長という人物は平家軍で知盛配下に属した有力な侍であったとしても、乳母子とするには無理があると考えるのである。

五、「乳母子」によって理想化された知盛

平家諸本のうち、古い形をとどめるといふ延慶本、語り本で古態を残すとされる屋代本、あるいは古態性が指摘されたことのある四部本では壇ノ浦の知盛入水に従った家長を「めのと子」とはしない。この場面での人物をめのと子と書くのは覚一本と、八坂流の本とされる城方本、語り本系の古本とも交流が深いとされる南都本、読み本の中で比較的遅くに成立したと考えられている長門本などや、その他覚一本より後に成立した本である。城方本が「めのと子」と書いていることに關して、本稿では平曲の流派の問題と関連させて述べることはできない。しかし、八坂流の屋代本、百二十句本、鎌倉本などはめのと子と書かないこと、また、この部分で知盛から「日來の約束はいかに」という内容の問いかけをするのは覚一本、長門本、南都本と共通しており、屋代本などは家長の方が日來の約束を口にしているという違いがあることは指摘しておく。また長門本、南都本に關しても、もちろんこの一点のみを以て覚一本との先後を考えるわけではない。しかし長門本は西光被斬で紀伊為範を知盛のめのと書き、一の谷の述懐中では家長を近習と書くことなどから、壇ノ浦知盛入水死に従う人物を「めのと子」とすることは、覚一本の意図的な造形であると考えたい。それは覚一本による「知盛の死の理想化」であつたのではないだろうか。

重盛亡き後、清盛の後継として一門の中心となつたのは、時子の子らすなわち宗盛、知盛、重衡であつただろう。同腹の建礼門院徳子は安徳天皇の母親である。物語の記述を見ても、宗盛が一門の総帥の立場にあり、知盛が軍事面では実質的な統率者であつたことが読み取れる。

しかし、やがて一門は都を落ち、戦乱に身を投じてゆくことになる。時子の子らも例外ではなく、建礼門院は入水の後引き上げられて大原で余生を過ごしたが、宗盛、重衡はそれぞれ戦の場で生虜となり、斬首という最期を迎え

た。彼らの、戦場での乳母子との行動が、物語に記されている。

人々はか様にし給へども、大臣殿おや子は海に入らんずる気色もおはせず、ふなばたに立いで、四方みめぐらし、あきれたる様にておはしけるを、侍どもあまりの心うさに、とほるやうにて大臣殿を海へつき入奉る。(中略)伊勢三郎義盛、小船をつとこぎよせ、まづ右衛門督を熊手にかけて、ひきあげたてまつる。大臣殿是を見て、いよ／＼しづみもやり給はねば、おなじうとりたてまつりけり。大臣殿の御めの子、飛驒三郎左衛門景経、小船にて義盛が舟にのりうつり、「我君とり奉るは何物ぞ」とて、太刀をぬいてはしりかゝる。(中略)景経うち甲をぬかせてひるむ處に、堀弥太郎のりうつて、三郎左衛門にくんでふす。堀が郎等、主につづいてのりうつり、景経が鎧の草摺ひきあげて、二刀さす。飛驒ノ三郎左衛門景経、きこゆる大力のがうのものなれども、運やつきにけん、いた手はをうつ、敵はあまたあり、そこにてつゐにうたれにけり。大臣殿は生ながらとりあげられ、目の前でのと子がうたる、を見給ふに、いかなる心地かせられけん。

(寛一本 卷第十一 能登殿最期)

本三位中将重衡卿、生田森の副將軍にておはしけるが、其勢みな落うせて、只主従二騎になり給ふ。(中略)めの子の後藤兵衛盛長は、しげ目ゆいの直垂に、ひおどしの鎧きて、三位中将の秘藏せられたりける夜目なし月毛にのせられたり。(中略)梶原源太景季、あぶみふぱり立あがり、もしやと遠矢によひいてゐたりけるに、三位中将馬のさうづをのぶかにぬかせて、よはるところに、後藤兵衛盛長、わが馬めされなんずと思ひけん、鞭をあげてぞ落行ける。三位中将是をみて、「いかに盛長、年来日ごろさはちざらざりしものを。我を捨ていづくへゆくぞ」との給へ共、空きかずして、鎧につけたるあかじるしかなぐりすて、たゞにげにこそ逃たりけれ。(中略)後藤兵衛は、いきながき究竟の馬にはのたりけり、そこをばなく逃のびて、後には熊野法師、尾中ノ法橋をたのんでゐたりけるが、法橋死で後、々家の尼公訴訟のために京へのぼりたりけるに、盛長ともしてのぼりたりければ、三位中将のめの子にて、上下にはおほく見しられたり。「あなむぎんの盛長や。さしも不便にし給ひしに、一所でいかにもならずして、思ひもかけぬ尼公の共したるにくさよ」とて、つまはじきをしなければ、盛長もさすがはづかしげにて、扇をかほにかざしけるとぞ聞えし。

(寛一本 卷第九 重衡生捕)

知盛の兄、そして弟の、乳母子との別れである。宗盛は、物語においてしばしばその不甲斐なさが強調される人物である。最後の合戦であるこの壇ノ浦でも、宗盛は侍の手で海中に突き落とされ、しかも沈みきれずに敵に引き上げられるという醜態を見せる人物になっている。そして、主君のもとへ駆けつけて奮戦する乳母子は、そのまま目の前で打ち倒される。最後まで総大将にあるまじき振る舞いであつた主君への乳母子の心情、その乳母子が殺されるのを間近で目撃しなければならなかつた宗盛の胸中、それぞれに立ち入つた描写はないものの、主従の悲劇的な幕切れである。片や重衡は、死ぬときは一所とも誓ひ合つたはずの乳母子に裏切られ、自害もできず、生虜の憂き目に遭う。こちらは主君ではなく乳母子の方を卑怯者として描き、重衡の受けた衝撃、焦燥、そして悲嘆が、読み手にも強く実感される場面である。主君を捨てて生き延びたこの乳母子を後に人々が憎々しげに評することからも、乳母子が主君を見捨てることは、一般の郎党が離反するよりも格段に憎まれるべき行為であつたのだらうことが分かる。

一門の中心である三兄弟のうち、このように二人は乳母子との最後を理想的に終えることができていない。ここに、知盛入水死に従つた侍を「めのと子」とした理由があるのではないか。一門の最後を見届け、敵の手に掛かることもなく自害する人物に、物語は理想の死として乳母子との一所での死を描こうとしたのではないだろうか。清盛の子ら三人とその乳母子との有り様を三者三様に描き分けると共に、源平最後の合戦を締めくくる人物を、その死まで武人として理想的に描こうとしたものと読むことも可能だろう。

また、知盛の最期に乳母子を配したのは、一方では木曾義仲、今井兼平の死との対比という意図も含まれていたのではないか。これについては既に高木信氏の御指摘がある⁽¹²⁾。氏は平家物語にしばしば登場する「乳母子と一所で死ぬという契約」を「遂行」しようとし「不発」に終わった義仲、兼平の物語に対して、知盛、家長の死を以下のように論じられた。

という物語（引用者注―覚一本の知盛入水死）は、〈契約遂行の物語〉である。〈知盛―家長〉の関係は、〈義仲―今井〉の關係の反復なのである。「反復」といういい方は正確ではない。〈義仲―今井〉關係の可能性の一つを示したものだという方がより正確であろう。〈義仲―今井〉が成し遂げられなかった物語を達成したのが、〈知盛―家長〉なのであり、〈義仲―今井〉關係が産み出す物語のヴァリアントに過ぎない。〈知盛―家長〉關係は〈結末〉の物語である。具体的な契約の内実も契約のなされたことの確認もないまま、「約束はたがふまじきか」という形でのみ契約の存在が示され、契約が遂行される。契約が果たされるまでのプロセスを欠くのである。彼らの行為が批判の対象とならないのは、《乳母子と一所で死ぬ》という契約（以下〈乳母子契約〉と称する）を遂行するべきだというコードが存在するからに他ならない。

氏の御指摘のとおり、知盛の「乳母子との死」は、義仲、兼平の物語との関連を考えさせる。しかしそれは成し遂げられなかった契約を補完する物語として構築されたというよりも、死なば一所の約束のもとで最後には主従二騎になつて戦い、そして相次いで死を迎える源氏側の武将の物語に対応するように、平家の側にも敗戦の果ての死を乳母子と迎える武将を造形したということではないか。

源氏、平家の対比においては一方に義仲、兼平、もう一方に知盛、家長の死を置き、平家の中でそれぞれの乳母子と主の有様を描く中では、特に清盛後継の三兄弟のそれを鮮やかに書き分ける。宗盛は、例えば盛衰記では取替子とされるなど、物語において低い評価を担わされる傾向があるが、逆に知盛は、武略にも秀で、一門の統率者として無闇に情に任せた判断はせず、しかし子息の死には率直な述懐とともに涙するなど、すぐれた武人として、また人間的な人物として造形されている。この、知盛の「理想化」は、たとえば古態をとどめるとされる延慶本では建礼門院の六道語りの畜生道を「宗盛知盛一船ヲ棲トシテ」過ごしたことで、人の口さがなさが聞き難い名を立てたこととされ

るものが、盛衰記では「兄ノ宗盛ニ名ヲ立ト云」と、知盛の名が削除されていることから伺える⁽¹³⁾。かつて富倉徳次郎氏は覚一本には「武人的なものの定型化が目につく」とされ、壇ノ浦合戦前の知盛の武士らを鼓舞する言葉を例に、これを覚一本の「意識的な改訂」と論じられた⁽¹⁴⁾。この改訂によって作り上げられた武人の死は、やはりそれにふさわしい死であらねばならず、覚一本はここに乳母子を登場させることで他本よりさらに知盛という人物を理想化していると考えるのである。

註(1) ただし『参考源平盛衰記』は乳母子と書く。

(2) 『保暦間記』第三(『新校群書類従』20)

(3) 『平家後抄』下(一九八一年／朝日新聞社)

(4) 『統群書類従』第五輯

(5) 『寛政重修諸家譜』第十八

(6) 『新版 系図纂要』第八冊上

(7) 『寛永諸家系図伝』第七、第十四

(8) 忠盛が家貞に下した文書が残っており(『平安遺文』第五卷)、また『玉葉』『吉記』などには貞能について書かれた箇所がある。

(9) 石井由起夫氏「壇之浦合戦の知盛について」(『國學院大學大学院紀要』第七卷 一九七六年三月)

(10) 『伺候院之入道法師 名西光 左衛門入道也 故信西乳母子云云』(『玉葉』承安三年三月十日)

(11) 前掲注(7)

(12) 高木信氏「男が男を(愛)する瞬間へ女の物語」としての『平家物語』は存在するか?」(『王朝の性と身体——逸脱する物語』一九九六年／森話社)

(13) 長門本はこの部分を覚一本と同様に書く。すなわち、龍宮城の夢を畜生道になぞらえるというものである。延慶本、盛衰記は、六道語りの畜生道とは別に建礼門院の龍宮城の夢を書く。苦患はないかという徳子の問に対し、延慶本は「一日三

時ノ患」があると答えるが、盛衰記はそれは「龍軸経」に説かれているとし、覚一本も「龍畜経」のなかに見えるとする。

(14) 『平家物語研究』（一九六四年／角川書店）

平家物語の本文は、それぞれ以下の本を参照した。

『平家物語』 龍谷大学善本叢書／『平家物語長門本』 名著刊行会／『南都本南都異本平家物語』 汲古書院／『平家物語』 国民文庫刊行会／『平家物語全注釈』／『平家物語』 講談社文庫、角川古典文庫／『延慶本平家物語』 勉誠出版／『源平盛衰記慶長古活字版』 勉誠社／『改定史籍集覧本 参考源平盛衰記』 臨川書店／『訓読四部合戦状本平家物語』 有精堂／『屋代本平家物語』 貴重古典籍叢刊／『平家物語』 新潮古典集成／『享禄書写鎌倉本平家物語』 原装影印古典覆製叢刊／『小城鍋島文庫本平家物語』 汲古書院

（つじもと きょうこ・関西学院大学大学院文学研究科研究員）